今は本当に平和だでいいね

増田幸一さん　90歳（新谷区）

私は昭和18年5月1日に海軍乙種飛行予科練習生（予科練）の20期として、三重海軍航空隊に入隊した。当時15歳でね。志願して試験に受かったもんだから、うれしいっけよ。学校でも先生が話すから、私は子供心に「自分は次男だから兵隊になってお国のために働くのだ」と考えていた。

兵隊はすごい人だだよね。村を出るときには村長をはじめ、村の人総出で送り出いてくれた。道に出てきてくれる人もあった。千人力と虎の絵が描かれたシャツをもらってね。千人の男性が「力」という字を寄せ書きして願掛けをしただよ。それから慰問袋をもらった。中には先生とか後輩とか、いろんな人からの手紙が入ってたよ。

予科練は毎日毎日訓練ばっかりで、上官の言うことは絶対服従の厳しいところだった。1人でも誰かが悪いと軍人精神注入棒という棒で、連帯責任で全員がぶたれた。そのときは嫌になるだけど、逃げる訳にゃいかん。

ある日、予科練が全員集められて、特攻隊への志願を募った。紙に○か×を書いて出すように言われたが、全員が○で出したようだったね。上官は、隊員に男兄弟が多いかどうかなどを考慮して選んでいた。

訓練を受けているうちに戦争はどんどん苦しくなって、昭和20年に日本は負けた。だから私は戦地へ行くことはなくなったけど、あともう少し終戦が遅かったら、自分も戦地へ行っていただろうね。負けたのは悔しいとも思ったけえが、その時には、本当に家へ帰りたいと思った。無事の帰還に、家族はとても喜んでくれたっけよ。

同期は亡くなった人も多いが、会えばいつも当時のことを話す。近頃は慰霊になればと、般若心経を写経しているよ。

▲左／訓練生の時につけていたノート。慰問袋に入っていた手紙が書き写されており「ワタクシモスグユキマス。テキヘイノオスソワケヲタノミマス」などの言葉▲右／千人力と虎が描かれたシャツ。今は薄いが、力という字が虎の画を囲ってびっしりと書かれている

忘れられん、あのつらさは

曽根そめさん　100歳（女岩区）

娘2人が10歳と7歳のとき、主人に召集令状がきて、豊橋連隊に行った。それまでは女学生に毎日訓練をつけていたっけ。令状が来たときには、私は良い気持ちにはなれんかったよ。生きて帰ってこられるか、全く分からんでね。でも、仕方ないだよ。そん時はありがたいと思って見送るしかなかった。

主人の両親と一緒に住んでいてね。戦時中は義父が海でわかめや魚なんかを取ってきてくれて。私はそれを菊川とか掛川とか、そっちの方まで自転車で行商に行って生計を立てたの。今みたいに舗装された道じゃないし、坂道も多くって。タイヤがパンクしたりなんかするともう大変だった。そうやって少しずつお米を手に入れてね。でも、それは食べずにとっておくの。主人が帰ってきたら白いお米を食べさせてやりたかったでね。

主人は豊橋からフィリピンに行って、それからはずっと生死不明。フィリピンのどこで、いつ、どんなふうになったか…誰も、全く何も帰ってこんかったで、わからんけ。帰ってきたのは白木の箱に紙切れ1枚入っていただけ。その紙切れには別に何も書かれていないっけだよ。

主人はね、元気で、体がいかくて、優しい人だっけ。帰ってこないって分かったときには、それはつらいっけの…。結局、お米は葬式用になっちゃった。

今は若い衆に囲まれて、かわいがってくれるで幸せだよ。だけんね、戦争の時分には本当に何もなくて。今の衆じゃわからんかもしれんけえが、配給を受けて、行商して、交換して、やっと食いつないできた。お金もないし、ここらには田んぼがなかったから大変だっただよ。

戦争はこりごり。平和にみんなして幸せに暮らす。これからもそれをお願いしたいね。

▲そめさん28歳の時の家族写真と、軍服姿のご主人。残念ながら、4人そろっての写真は残っていない